



## 取締役

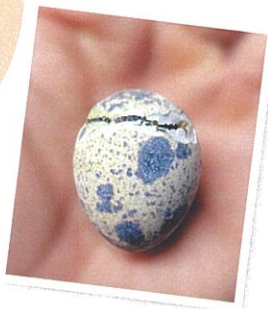
はたの りえこ  
幡野 理絵子さん

約25年前、未経験からスタート。幡野社長の知識と経験、そして“うずらへの想い”のすべてを、まるでコピーするかのように学び、実践することで、飼育技術の礎を築いた。現在は取締役として活躍中。

# うずらの一生とその舞台裏

繊細で個性豊かなうずら一羽一羽の命に向き合う、幡野ファームの育成現場。食卓に届く卵の裏側にある、命を育む物語に迫ります。

## 幼雛期 新生児のように全方向へ気を配る



うずらのヒナは自社の孵化場で、週に一度約1万3000羽が孵化し、「幼雛舎（ようすうしゃ）」へやってきます。生後15日齢までの幼雛期は、最も手がかかる時期。餌は多すぎず少なすぎず、絶妙な量を見極めて朝夕に与えます。水も冷たいとお腹を壊すため、常に適温を維持しなければなりません。より良い環境を目指し、温度管理がしやすい新型の飲水機へ切り替えるなど、環境のアップデートを続けています。



## 中雛期 次のステージへ進むためのトレーニング期間

生後15日齢でワクチンを接種後、33日齢まで「中雛舎（ちゅうすうしゃ）」で過ごします。ここは次に移る「成鶏舎（せいじゅんしゃ）」での生活に適應するためのトレーニングの場。成鶏舎と同じ設備を使い、自分で餌や水を探す練習をします。最初は飲水機に気づかないため、流水を併用して場所を示しますが、1羽が覚えると、周りの子もまねをしてすぐに覚えていきます。



## 成鶏期 光を浴びて、命をつなぐ



33日齢で「成鶏舎」へ移動すると、産卵期が始まります。うずらは光の量で産卵がコントロールされるため、中雛舎では夜を長く、成鶏舎では少し短くして光の刺激で産卵を促します。移動後1週間ほどで産み始め、安定すると1羽あたり平均27時間で1個、約1年間卵を産み続けてくれます。

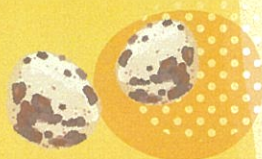


## うずら飼育の注意点

### ストレスを和らげるための工夫が重要

うずらは非常に繊細な生き物。当然、人間の言葉を話さないなので、私たちが日々の様子を細やかに観察し、状態を汲み取ることが不可欠です。以前と同じ育て方が通用するとは限らず、常にそのときの鳥たちに合わせた対応が求められます。

また、臆病で環境の変化に敏感なため、特に成鶏舎では急に人が現れて驚かせないように、入室前に電気をつけて「今から人が行きますよ」と合図を送ります。いつも同じ服と同じ靴で世話をしていると「この人は知っている人だ」と安心してくれるため、同じ格好で接して「あなたたちのお世話係ですよ。味方ですよ」とうずらに伝えています。



## 思い出に残るエピソード

### 皆で育てた特別な1羽 「シロちゃん」

以前、1羽だけ体の色が薄いヒナがいました。通常、そういった個性を持つ子は体が弱く、長生きできないことが多いのですが、その子はとても元気に育ってくれました。他の子と見分けがつかないので、いつしか私はその子を「シロちゃん」と呼んでいました。

他のスタッフもシロちゃんのことを気にかけてくれて、「お嬢様」と呼ぶように。特別なケージで見守りながら大切に育てました。すると、シロちゃんは無事、成鶏に。卵を産むという役割も立派に果たしてくれました。

産卵を頑張る子はエネルギーを使うため、少し毛が抜けてきます。シロちゃんの毛が抜けているのを見て「ちゃんと産んでくれているのだ」と思いました。そして、日本のどこかで、誰かが、シロちゃんの産んだ卵を食べてくれたはずだと思うと、本当に感慨もひとしおでした。

なお、うずらは本来、1年で入れ替えのサイクルが来ます。しかし、スタッフがシロちゃんだけをそっと別の場所に移し、本当にギリギリまで飼育してくれました。1羽の命を通してスタッフの一体感が生まれた、忘れられない出来事です。



▲ シロちゃん(写真右)

